

未来のアスリート発掘事業 活動報告 11期生 Vol.16



第16回育成プログラム開催

開催日時 3月11日(土) 15:00~18:00

会場 富山県総合体育センター 会議室・大アリーナ

プログラム内容

【スポーツ講演会】

『富山からオリンピックへ ～2020からのメッセージ～』

水泳・水球競技 リオデジャネイロオリンピック出場

保田賢也 先生 トウインクル・コーポレーション



※ コーディネーターNPO法人Tスポとやま 土田由香里 アナウンサー

【コーディネーショントレーニング⑩】

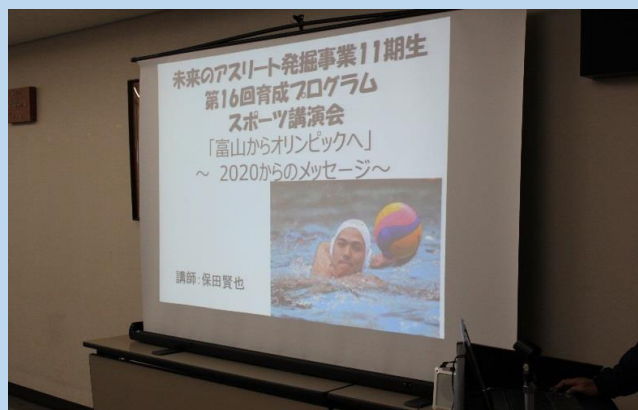
東根明人 先生 (一社) コーチングバリュー協会代表理事

大羽瑠美子 先生 (一社) コーチングバリュー協会専任コーチ



アスリート55名参加

水球競技の日本代表としてリオデジャネイロオリンピックに出場した保田賢也選手を講師に招いて、これまでの競技生活におけるエピソードや心構え、五輪出場で感じたことなど、アスリート11期生に、スポーツに対する熱い思いを語っていただきました。



お話しの詳細は「Truth VOL.9」に掲載されています。



「夢を言葉にし、イメージを」

水球の日本代表としてリオ五輪に出場した保田賢也選手。

日本は32年ぶりの「五輪切符」獲得であり、注目を集めました。

タレントとしても活躍する保田選手は一躍「時の人」に。

競技の第一線から退いたものの、水球の普及に奮闘する姿は本当にカッコいい！

「富山の未来のアスリート」11期生の約60人を前に、

2020年東京五輪に向けてスポーツへの情熱を語ってくれました。

——競泳から水球へ転向し、五輪出場という夢をかなえた保田選手は、どんな少年時代を過ごしたのでしょうか？

家と学校、プールはすべて1キロ以内の場所にあり、学校に行く以外は「水球にどっぷり」という生活。チームでの練習が終わっても、キーパーのチームメイトに残って、シュート練習をしました。納得のいく1本が決まるまでやめません。水球が好きだったので、苦にならなかったです。いい指導者にも会えました（と言って恩師の木倉敏彦先生の方に視線を送る）。

高校時代はインターハイで準優勝。国体も出場したけれど、日本にはなれませんでした。「やるからには優勝を」といつも思っていました。あの頃に戻れるなら、インターハイが国体で優勝する目標を達成したいなあ。しかし、惜しいところで負けた経験があったから、その後も続けてこれれたのだと思います。

思い出に残っている出来事は、海が近かったので、海までダッシュし、水球したこともあったですね。先生は「何をしたいか？」と問い

てくれました。また、やりたくないことも。自主性を大事にする指導でした。

——筑波大入学後は日本代表入りを果たしました。しかし、決して順調ではなかった。悔しいこともあったはずですか？

フル代表に選出された時は「選ばれてラッキー」という感じでしたね。チームの中に10歳ぐらい年長の選手もいて、パスつ出すのにもドキドキしました。緊張して頭が真っ白になったことも。ついて行くのに必死でした。重圧がすごかったですね。慣れと経験が必要だった時期です。

フル代表から外れた時期もありました。「何で？ 自分に何が足りないのか？」と思い、ビデオを見て研究しました。しかし、自分の欠点はなかなか分からないものです。だから人に聞きまし

た。思えば天狗になっていたのですね。その後、無事復帰したので外された経験は糧になりました。

ロンドン五輪の予選も代表から外れ、練習相手として合宿に参加していました。アジアでは1チームしか出場権がなく、僅差でロンドン五輪出場を逃しました。「日本はもう少しだ」と確信し、寝ても覚めてもリオ五輪に出ることばかりを考えるようになりました。年間200日ぐらい合宿に参加し、辛かったけれど、やめたとは思いませんでした。大学時代に水球と芸能界、どちらの道に行くかの決断を迫られたこと



やすだ・けんや 1989年3月29日富山市生まれ、28歳。富山市大広田小、富山北部中、富山北部高、筑波大卒。中学・高校時代は富山ウォーター・ポロクラブに所属。筑波大卒業後はブルボンウォーター・ポロクラブで活躍。2014年アジア大会準優勝、16年リオ五輪出場。



もあった。しかし、「優勝しないで水球をやめていいの？」って、どっちもあきらめたくないと思いました。

——やはり、五輪は夢の舞台でしたか？「両親もリオへ行かれたのでですね。地元富山も盛り上がりました。」

五輪はスポーツ選手として1度は行かねばならない場所です。世界選手権とは違う。五輪予選前はテレビカメラが2台しかついていなかったのに、代表権を得て帰国したら30台も集まっていた。「五輪に出るぞ」と思いました。

五輪予選の前の合宿では、こは

んがのどを通らないほど練習しました。1人だったら、やめていたでしょう。チームだからこなせた練習でした。年間200日以上も一緒にいたら、気持ちが分かるようになりました。4年間一緒に頑張ってきた仲間と五輪に行けたことが何よりうれしかったです。

また、僕らの力だけで出られたわけではない。過去の先輩たちの頑張りがあった。日本代表OBからは「水球をもっとメジャーにしてくれ」と言われました。いざ五輪の舞台に立つと、緊張はなかったですね。楽しみたいという気持ちが大きく、マイナスの感情やプレッシャーはありませんでした。

海外の選手の強さは痛感しま

した。丈夫な海パンが引つ張られ、破れることも。身長2メートル、体重100キロの選手なんてざらにいます。182センチ、80キロの僕など小柄です。勝てないですよ。だから日本は頭脳と技術と体力で勝負せざるを得ない。海外の選手にはこなせない練習を経て本番に臨みました。

——保田選手のこれから、そして「富山の未来のアスリート」へエールをお願いします。

競技の第1線からは退きました。今後、自分が何をしたいかは明確に決まっています。ただ、「水球がマイナースポーツで終わってほしくない」という気持ちから、競技の普及に貢献したいと考えています。リオ五輪に出場したことで、水球の認知度は上がった。2020年は出られるけれど、東京の次に出られなかったら、目の目を浴びることのないスポーツになってしまう。継続して五輪に出ることが大切です。

3年後は解説など選手時代とは別の立場で水球を盛り上げていくはず。3年後の日本代表がメダルを獲得してくれたら、僕の活躍の場も広がるでしょう。

芸能界での活動も引き続き行っていく。これからの人生、とことん悩みたいと思います。悩むというのは、前に進むうとしていく証拠ですからね。

皆さんもそうですよ。悩んでください。悩まない人、挫折しない人はいない。人生の分岐点に来たら、難しい方を選んでほしい。勉強と一緒に。分からない問題に直面した時、すぐ答えを求め



てはダメですよ。「自分はこうなりたい」と夢を言葉にし、具体的にイメージしてください。予測しておく、チャンスに恵まれたらすぐに動けます。前向きに夢をかなえていきましょう。

聞き手 土田 由香里
interview by Yukari Tsuchida
文・写真 若林 朋子
text and photo by Tomoko Wakabayashi



コーディネーショントレーニング⑩

